



舞台演劇



大沼孝次

台本

舞台演劇『なぜ、こんな殺人事件が起こったのか？』

■キャスト

渡辺玲奈

山田拓夢

鈴木信也

やくざ者・内村聡

刑事・円城寺

■台詞

舞台は、真っ暗なまま。

そこで若い男2人と女1人の声だけが聞こえる。

山田「だ、だめだ。もう死んでる」

玲奈「あ、あたしは・・・なんてことを・・・」

山田「おまえが、どうしても運転してみたいだなんて言い出すから。あのとき、やっぱり、止めていれば、こんなことには・・・」

暗い舞台上に、左側からオレンジ色の点滅する弱いライト入る。

これは、つまり、クルマで人ひいちゃって、
ウインカーつけて右側にクルマ停めてんだよね。
ライトだけで、この情景を観客に想像させよう。

そう、なので、このオレンジ色にカチカチと点滅するだけの舞台上に、
死体役と男2人、女1人が登場しています。

玲奈「こんな夜道に、そんな、人がいるなんて、そんなの。そんなこと・・・」

鈴木「いまさら、しょうがないよ」

玲奈「ねえ、どうしよう？ねえ、どうしよう？」

山田「とにかく、警察だよ。警察に電話しよう」

玲奈「あたし、刑務所、入るの」

山田「いや・・・どうなんだろう。わからないよ、そんなこと」

鈴木「その男・・・おれ、知ってる」

山田・玲奈「えっ」

鈴木「おれが働いてるバーに、よく来るやつだ。暴力団だよ、こいつ」

山田「暴力団・・・」

鈴木「暴力団、殺しちゃったなんて。これは、ただで、すまないぞ。復讐されるぞ、おれたち」

山田「そんな・・・」

玲奈「ねえ、どうしよう、どうしよう、ねえ」

鈴木「山田、こいつをトランクに隠そう。トランクに入れてるキャンプ道具を全部、後ろの座席に移せ！誰かに見られるとまずい！はやくはやく！はやくしろ！」

山田「ど、どうすんだよ！こんなことして！」

鈴木「いいから、はやくしろ！」

と、ここでオレンジ色の点滅終わり。

舞台、照明オン。

ペンション、というか、まあ、普通の応接セットでOKじゃない？

テーブルには、よく、ありがちな、大きなガラスの灰皿、置いて。

ブルーシートで、ぐるぐる巻きにした死体を
三人で部屋の中へ運びこんでいる。

山田「大勢の人たちに見られたぞ。やばいよ、やばいよ絶対」

鈴木「おれたちはキャンプ道具を運んでるだけだ。大丈夫だ、あやしまれやしないよ。
あっちだ。あっちの風呂場に置こう」

山田「なあ、おれたち今、いったい何やってんだよ。なあ、鈴木」

鈴木「玲奈、扉をあける。いいから！はやく！」

こうして風呂場へ置きました、と。

そして三人、部屋へ戻る。

玲奈は床に座り込む。

山田は頭を抱えてソファへ。

鈴木は立ちすくむ。

山田「ああ、おれは、いったい何やってんだよお。こんなこと、こんなこと、絶対、見つかる！絶対、見つかるって！」

鈴木「なにもなかったことにしよう！どこかに死体を棄てよう！」

山田「あんな大きなもの、また運ぶのかよ！無理だよ！そんなの絶対、無理だよ！」

鈴木「細かく切って棄てよう。頭と、胴体と・・・胴体は2つくらいに切れば・・・」

山田「おまえ、本気かよお！」

玲奈「うわああああ！」

叫びながら男は、座り込んで震えている山田に襲いかかる。
馬乗りになって、両手で山田の首を絞めている。
玲奈は四つんばいのまま、床に顔を押し当てて悲鳴を上げた。

玲奈「いやあああああ！」

鈴木は咄嗟にテーブルの上の大きなガラスの灰皿を右手にとると、それで男の頭を殴りつける。

男「あっ」

男は、この一撃で、白目をむいて、仰向けに床へ倒れる。

玲奈「いやあああー！ いやあああー！」

悲鳴をあげ続ける玲奈を、鈴木は抱きかかえる。

鈴木「静かにしろ！ 静かにするんだ！」

玲奈、鈴木にしがみつき、その胸元で震えて泣き続けている。

鈴木「誰か、来る！」

山田「あ、足音・・・」

沈黙。

鈴木「誰もいない・・・気のせいだ」

山田、尻餅をついて座り込んだまま。

山田「死んでなかったんだ・・・」

山田、がたがた震えている。

鈴木「そうだ。おまえが殺したんだ」

山田「えっ!？」

鈴木「もう本当にやるしかないんだよ。もう・・・」

そして舞台は暗転。

暗闇のなかでテーブルとソファ撤収。

床にカーペットを敷いて、ベッドとテーブル設置。

テーブルの上にテレビのリモコン置いて。

この模様替え、舞台やってる人たちは得意技、ですよね？

玲奈の部屋に、なります。

スーツ姿の玲奈、会社より帰宅。

ため息ひとつ、そのままベッドに腰掛ける。

中空を見つめたまま、少し考え込んで、そして、なにか慌てるようにテレビのリモコンを手にする。

テレビの画面を注視している玲奈。

続いてケータイをチェック。

たぶん、ヤフーニュース、見てる玲奈。

玲奈、ほっと、胸をなでおろす、みたいな。

両手を額に、そのまま、あおむけにベッドに。

玲奈「あれから三ヶ月。悪い夢だったんだ・・・。みんな、ぜんぶ・・・なにもかも・・・」

なんとなく、小さく笑ったりもする。

そこにピンポーン、とベルの音。

もう一度、ピンポーン。

ゆっくり上半身を起こす。

また、ピンポーン。

玲奈、ゆっくりと立ち上がり、玄関の扉へ。

扉の覗き窓から外を見る。

玲奈、静かに、ゆっくりと、後ずさり。

ふるえながら。

極度に、おびえながら、極度に緊張しながら。

そのままベッドの布団にもぐりこむ。

また、ピンポーン。

玲奈は、震えながら、布団のなか。

舞台、暗転。

真っ暗な舞台の上で、電車の音だけが響く。

そして、また、薄明かりの舞台。

スーツ姿で、右側から歩いてくる玲奈。

そして左側から近寄ってくる茶色コートの中年男。

円城寺「すみません。渡辺玲奈さん、ですね。わたし、警察の円城寺と申します。

日中、お勤め先にお伺いしようかとも思ったのですが、ごめいわくかなあ、と思ひましてね。昨夜も来てみたんですが、お留守のようで。部屋の電気は点いていたんですけど」

玲奈「あ、すみません・・・知らない人だったので」

円城寺「ああ、やっぱり、そうでしたか。若い女性の1人暮らしだとねえ。いや、これは大変失礼しました」

玲奈「どのような、ご用件でしたか」

円城寺「ええ、実は、ですねえ。鈴木信也さん、ご存知ですよ？ 丘の上公園、ここから、そんなに遠くないところですよ。死体で発見されて・・・」

玲奈「・・・・。」

円城寺「驚かない、ですか？」

玲奈「あ、いえ・・・驚いています」

円城寺「・・・・どんなふうにしたのか、聞かないんですね？」

玲奈「えっ？」

円城寺「いや、みんな聞くんですよ。どうして、なんで。どんなふうにしたんですか、って。あなた、聞かないんですね」

玲奈「えっ？ い、いや・・・あんまり突然だったから」

円城寺「ああ、まあ、そうですね。クルマは放置されていて。少し離れた崖の下に遺体がありました。あのへんは木がたくさん生い茂っていて、発見が遅れました。鈴木さんも1人暮らしで、故郷の親御さんが連絡が

つかないと捜査願いがありまして。

それで、ようやく、死体で見つかった、と。

鈴木さんはバーで働いていたんですけど、突然やめる人は多いらしくて。

不審には、思わなかったらしいですね」

玲奈「そうなんですか・・・」

円城寺「・・・なんで聞かないんですか?」

玲奈「えっ?」

円城寺「みんな聞くんですよ。自殺ですか、って」

玲奈「えっ・・・」

円城寺「・・・。」

沈黙の時間をつくりましょう。

ね、この沈黙、こわいでしょう笑

円城寺、おもむろに胸ポケットから手帳を取り出す。

そのメモ書きに目を落としたまま言う。

※ここから以下、続き、で一す。

円城寺「携帯電話の通話履歴を調べましてね。鈴木さんが亡くなる前、あなたに何度も電話をかけています。しかも、ずいぶん長時間、話をされていますね。あなたからも鈴木さんに、何度も電話をかけています。ちなみに、あなたは、今はもう機種変更して、携帯の通信会社を変えて、電話番号も変えたようですが、過去の履歴は残っています。それで事情を、お伺いに来たわけなんですけど」

玲奈「自殺、なんですか?」

円城寺「まだ、わかりません。遺体の腐敗がひどくて。いま、いろいろ調べているところなんです。でも、それが、とても不自然で・・・」

玲奈「すみません・・・ちょっと、気分が悪いんで・・・」

円城寺「ん? 帰ります? そうですね、もう、こんな時間になってしまった。では、明日、午前中にでも、お勤め先にお伺いしますので」

玲奈「えっ! 職場に来るんですか」

円城寺「あなた、何を言ってるんですか？ おかしいですよ。人が死んでるんですよ。しかも、それは、あなたの友達じゃないですか？ 普通は、みなさん、協力してくれますよ。不自然ですよ、あなた」

玲奈「あ・・・」

円城寺「では、明日11時に・・・」

玲奈「あっ、職場には、ちょっと」

円城寺「それとも任意同行ということで、警察署でお話させて頂いても、よろしいですか」

玲奈「いや・・・じゃ、じゃあ、明日の夜、うちに来てもらったほうが。明日は9時には帰ってこられますから」

円城寺「百貨店の仕事っていうのは、ずいぶん遅くまで働くんですねえ」

玲奈「あ・・・。い、いま祭事をやってまして、いろいろ大変で」

円城寺「祭事？ ああ、全国グルメ祭り、ですか？ ああ、地下の食品売場で、やりましたねえ。それにしても、すごく、たくさん、お客さん来るもんですねえ。いやあ、遠くから見てたんですけどね、あなたも忙しそうだった。ええ、と。それじゃあ・・・明日の夜9時、あそこ、その駅前の喫茶店でどうですか？ もし、遅くなるようでしたら、こちらに電話ください。これが私の携帯の番号ですから。それでは、失礼します」

それだけ言うと円城寺、立ち去る。

玲奈、両手で名刺を持ち、名刺を見つめたまま、立ちすくむ。

と、ここで舞台暗転。

喫茶店のセット、簡単なものでよいですよ。

小さいテーブルと椅子、コーヒーカップ二つだけで良いと思います。

照明も、そこだけ映し出すスポットライトで良いと、思います。

ということで、喫茶店になりましたよ、と。

玲奈「なにが、不自然なんですか？」

円城寺「えっ？」

玲奈「昨日、言っていましたよね。鈴木くんの自殺が不自然だって」

円城寺「そりゃあ、そうでしょう。自殺するには理由があるんですよ。人間関係だとか金銭トラブルだとか。

でも、鈴木さんの周辺からは、そういった問題は、いっさい見当たらない。
どうして自殺しなきゃなんないんですか?」

玲奈「急に気分が落ち込んで、それで自殺しちゃうことだって、あるんじゃないですか」

円城寺「女性はあるんですけどね。男性は、そんなことで自殺するケースは、まず、ないです。もっと確信的な、なにか大きな問題が起こらない限り、気分の変化で自殺することは、まずないです」

玲奈「でも・・・腐敗がひどくって、って。殺されたのか、自殺したのかなんて、そんなこと、3ヶ月も経った死体で、どうして、そんなこと、わかるんですか?」

円城寺「3ヶ月? どうして遺体が、3ヶ月経っていることを知っているんですか?」

玲奈「あっ・・・」

円城寺「わたしは、遺体は腐敗している、とは言いましたが、死後3ヶ月が経っているとは言っていないが・・・」

玲奈「あっ・・・さ、さいごに会ったのが、3ヶ月前でしたから、そうなのかな、と」

円城寺「ああ、なるほど、そういうことですね・・・」

玲奈「あ、はい。それから連絡とれなくなったから・・・」

※このあたり、円城寺は、手帳を見ながら会話してます。
なので役者は台詞を、おぼえなくてもOK。

円城寺「たとえば、足跡なんですけど」

玲奈「足跡?」

円城寺「はい。現場の足跡です。

たとえば自殺の場合なんですけど。飛び降りの場合なんですけど。

女性の場合は、しばらく、そこに立ち止まって。正面から落ちるんですよ。足跡がね。両足をそろえて、つまさきから、ぐーっ、と、地面に重みの跡が残ってるんです。そういう足跡が、女性の場合は多いですねえ。

いっきに走って、そのまま飛び降りる場合もあるんですけど、そんな場合は自殺だけでなく、事故の可能性もあるわけですよ。

たとえば酔っ払ったりしてて、特に夜だと暗いからね、そこに崖があるなんて、気がつかないで。ハードル競争みたいだね、ガードレールを飛び越えてしまっ。そこに原っぱが広がってると思ったら崖だった、とかね。その場合は、走った足跡が残ってるわけです。まあ、それは男女関係なく、あつたりしますけど。

男性の場合は、たいていの場合、ためらうんですね。ああ、どうしようかなあ、って。いったりきたり。あた

りを、うろうろしてる足跡が残っている。こわくて、後ろ向きに背中から落ちる。その場合は、崖のふちに後ろ向きに立っててね。両足をそろえてね。

だから、崖のふちに両方のかかとの足跡がないんです。男性の場合は、そういうケースが多いですねえ。

鈴木さんの場合は、このどちらでもない。

どうも、ガードレールから、斜めに、すべりおちるような格好で、落ちてるんですよ。

斜めやや後ろから、ずる、っと、落ちてる。

それは自殺するには、とても不自然な足跡なんです。

要するに、それは、誰かに突き落とされたみたいなの形なんです」

玲奈「足跡なんて、たくさんあるじゃないですか……。あの公園にゆく人は、何人もいますし」

円城寺「よくご存知ですね」

玲奈「えっ。……。あ、何度か、行ったことが、ありますから」

円城寺「そうなんです。何人も、人が行き来します。しかも、もう3ヶ月も前の足跡ですからね。足跡の上に足跡がついてて。さらに、そこに、また新しい足跡がついてて。

雨も降ったりして。

でも、鈴木さんの足跡は、わかりました。

だって遺体は靴をはいていましたから。

その靴底と同じ跡を、探せばいいんですから。

まあ、時間はかかりましたけど。

たくさん人がやってくる公園だとしてもね、崖っぷちに立つ人は、あまりいません。

そして、もし、自殺だったとしたら、鈴木さんの足跡は、崖っぷちにあるはずなんです。

でも、鈴木さんの足跡は、崖っぷちには、なかったんです。

鈴木さんの最期の足跡は、ガードレールの内側にあったんです。

ガードレールから上半身をのけぞるような体勢で、斜め後ろ、背中の方から落ちたことが、わかりました」

玲奈「……………」

円城寺「誰かに突き落とされた、という見方が自然です」

玲奈「誰かに……………」

円城寺「でも、おかしいんですよ。

誰かに突き落とされると、人間は、その相手の体を掴むんですよ、反射的に。

そうすると遺体の手は、なにかを必死に握った残り物があるんです。

たとえば女性から突き落とされたりするとね、遺体の右手には……たいてい右利きが多いわけですから、だから利き手である右手にね、こう、ながーい、髪の毛が、一本、二本、あつたりするわけなんです。

しかし鈴木さんの両手には、そういうものがなかった。

衣類の繊維も、髪の毛も、ありませんでした。

鈴木さんは誰かに殺された？ それとも事故？

結論として、死因は、まだ、特定はできません」

玲奈「……………」

円城寺「あなたの他にも、もう1人、鈴木さんが、よく電話をかけていた方がいたんですが。その方は、いま行方不明なんです」

玲奈「……………」

ここで少し、沈黙の時間、入れよう。

円城寺「不自然ですよねえ。なんで、あなた、ずっと黙っているんですか？」

玲奈「えっ！」

円城寺「あなた、知ってるでしょう」

玲奈「なにを……………」

円城寺「山田拓夢さん。鈴木さんと高校時代の同級生でした。卒業名簿を見てたら、あなたの名前もを見つけました。あなたも一緒だったんですね？ 同じ故郷の、同じ高校、ですよ、鈴木信也さんと山田拓夢さん、そして、あなたの3人は」

玲奈「……………」

円城寺「そうして、なぜか今年の初めから、あなたたち3人は、よく連絡をシェアうようになった。つまり今年の1月、なにかのきっかけで、3人が会うことが、あったんでしょうね。たぶん、偶然ね。それで、よく電話をシェアう関係になった、と。で、お聞きしたいんです。あなたは鈴木さんと、電話でどんな話をしていたんですか？」

玲奈「あ……………」

円城寺「山田拓夢さんとも、あなたは連絡を取り合っていたんですね？」

玲奈「……………はい」

円城寺「3人で旅行にいった、そこで何があったんですか？」

玲奈「えっ？」

円城寺「鈴木さんは働いていたバーで、高校時代の仲間と旅行に行くと言っていたそうです。山田さんも勤め先の上司に旅行にゆくからと有給休暇を取っていました。だから、鈴木さんと山田さんは休みを合わせて、連絡を

取り合っていました。あなたも一緒に行っただすよね、3ヶ月前に。携帯電話の通話履歴を調べると、鈴木さんも山田さんも、そして、あなたも彼らと頻繁に連絡を取り合っていた。この3人だけです。つまり、あなたも旅行にいったんですよね」

玲奈「あっ・・・はい」

円城寺「3人で。いったい何があったんですか？」

玲奈「携帯のメールも、見たんですか？ わたしが送ったメールとか・・・」

円城寺「はい？それは、なにか・・・警察に見られては困るようなことを、あなたが書いている、ということですか？」

玲奈「えっ！」

円城寺「そういうこと、なんですか？」

玲奈「あ、いえ・・・プライベートなことなので・・・」

円城寺「・・・通話の履歴だけです。殺人事件の可能性があるので。鈴木さんの携帯電話は見つかっていません。鈴木さんの遺体は、やぶのなかで見つかりまして、また、そこは、ひどいんですよ、ゴミの山で。いま、大勢の捜査員が・・・いやあ、あれは捜査以前の問題。まさにゴミ掃除ですよ。でも、必ず見つけますよ。あのゴミのなかに必ず、鈴木さんの携帯電話が落ちてるはずですよ。

その際は、申し訳ありませんが、メールの内容は確認させていただきます。

事件の可能性が高いわけですから、その点は、申し訳ありませんが、承諾していただきます」

玲奈「あ・・・は、はい」

円城寺「ま、そういうこと、なんです。

それで、最初の質問に戻ります。よろしい、ですよ？

鈴木さん、山田さん、そして、あなたは3ヶ月前の2月10日から3日間、一緒に旅行をした。

あなたたち3人だけだったんですか？

他に同行者は、いたんですか？」

玲奈「いえ・・・わたしたち、3人だけ、です」

円城寺「鈴木さんのクルマで出かけましたね。どちらへ、お出かけになったんですか？」

玲奈「富士山のふもとの・・・ロッジへ」

円城寺「それは2月10日の夜、1泊だけですね。11、12、13・・・この3日間は、どちらへ？」

玲奈「そのあとは・・・大阪まで行って・・・四国に行って・・・。それから帰りました」

円城寺「クルマで、高速に乗って？なににしに、行ったんですか？」

玲奈「ドライブを・・・」

円城寺「ドライブを？」

玲奈「そう・・・ドライブ・・・」

円城寺「楽しかったんですか？」

玲奈「ええ・・・。まあ・・・」

円城寺「あなた、ずっと後部座席で寝てたじゃないですか。あなたは、そんなドライブが楽しかったんですか？」

玲奈「えっ！」

円城寺「高速道路にはカメラが設置されていてね。最近のカメラは高精度で、後部座席で、あなたが、ずっと寝ている横顔も、しっかり映っていました。大阪まで、その先まで、あなたは、ずっと寝ていた。そんなドライブが楽しかったんですか？」

玲奈「あ、いえ・・・具合が、悪くなって・・・」

円城寺「じゃ、なんで、帰らなかったんですか？」

玲奈「えっ」

円城寺「具合が悪くなってしまったのなら、電車に乗って帰ればよかったんじゃないんですか？」

玲奈「ああ・・・お金が・・・お金が、もったいなかったから」

円城寺「お金が、もったいなかったから？電車賃が？」

玲奈「あ、はい」

円城寺「ずっと、具合が悪かったのに？」

玲奈「・・・。」

円城寺「2月10日、3人の旅行で最初に宿泊した富士山麓のペンション山家で、あなたたちが宿泊した山小

屋で、男の叫び声と女の悲鳴が聞こえたという証言が取れています。
そこで、なにがあったんですか？」

玲奈「・・・けんかに、なって、しまって・・・」

円城寺「大声で叫んだり、泣いたりして。そんなに、ひどいけんかをした上に、具合まで悪くなってしまって。
それでも、あなたは旅行を続けた。それは、どうしてなんですか？」

玲奈「それは・・・」

円城寺「それは？」

玲奈「・・・。」

円城寺「高速1号線沿いのパーキング・エリアのゴミ箱から、バラバラにされた肉片が発見されました。清掃局からの通報で、わかったんです。静岡では頭、大阪では腕、東京では衣類・・・そんなふうには、東京まで。おそらく、棄てやすくするために、切り刻んだんでしょう。

計画的な死体損壊、死体遺棄です。

死体の身元は、すぐに、わかりました。

特別指定暴力団、関東組の構成員、内村聡。

暴力団の内部抗争ではないかと捜査を続けてきたのですが、どうしても、つじつまが合わなくて。

そこに今回の鈴木さんの事件が浮上しました。

内村の衣類から、クルマに使用する塗料の一部が発見されました。

この塗料が、鈴木さんのクルマと一致しました。

そして死体遺棄の日時、あなたたちがドライブをしていた日時と一致します。

つまり鈴木さんのクルマが内村を轢き殺した。

そしてペンションまで死体を運んで、切り刻んで棄てた。

そうなんですか？」

玲奈「いや、あたしは・・・」

円城寺「なにがあったんですか？教えてください」

玲奈「あ、あああ・・・」

円城寺「ドライブに出かけた初日の夜、人をはねたんですよね？」

玲奈「いや、死んでなかったんです。けがしただけで。だ、だからクルマに乗せて、病院へ連れてゆこう、って」

円城寺「病院？病院に連れてゆこうという人を、クルマのトランクなんかに詰め込みますか？クルマのトランクから血液反応が出てるんです。内村の血液と一致しました」

玲奈「あ・・・そ、それは・・・。生きていたんです！ほんとうに！わたしは、なんにも、わたしは、なんにも、してません！」

円城寺「鈴木、山田の2人が、内村さんを？」

玲奈「そうです。わたしは・・・ただ、こわくて・・・。関係ない。わたしには、関係ないことです」

※うーん、どうかなあ？

いろいろ悩み中

円城寺、深くため息をつく。

円城寺「やっぱり・・・。脅されていたんですね」

玲奈「・・・はい」

円城寺「鈴木が運転中に、あやまって内村を轢き殺した？でも、あなた、さっき、生きてた、と言いましたね。そのときは、まだ内村は生きていたんですね」

玲奈「・・・そうです」

円城寺「重症の内村をトランクに入れてペンションまで運んだ？」

玲奈「わ、わたしは、すぐ警察に連絡しよう、って言ったんです。でも、2人に脅されて。どうにもできなかつたんです」

円城寺「ペンションで内村を殺したのは、誰だったんですか？」

玲奈「鈴木くんです。ガラスの、大きな灰皿で殴って。そして鈴木くんは、山田くんと、2人で・・・」

円城寺「バラバラにして棄てよう、と？」

玲奈「・・・そうです。わたしは関係ない。関係ないんです」

円城寺「わかりました。山田は行方不明なわけなんですけど、どこに逃げたのか、わかりませんか？」

玲奈「・・・さあ・・・わかりません」

円城寺「おそらく、山田が鈴木を殺害したんでしょうね。こうした事件の場合、たいていは、金銭トラブルになるんです。おそらくこの事件をネタに、鈴木が、山田をゆすったんでしょう。鈴木はバイト暮らしなのにクルマ

のマニアなんですねえ。車検なのに、お金がなかったらしいですから。それで、こわくなって山田が鈴木を殺害したのか……。

どちらにしても事情は、もう山田と、あなたしか知らない。

これから、あなたには、頻繁に警察署に来ていただくことになります」

玲奈「わたしは被害者なんです。もう、かかわりたくないです」

円城寺「そういうわけにはいかないですよ。鈴木が事故死なのか殺害されたのかも、まだ、わかっていないんですし。死体損壊と殺人容疑で山田を緊急手配しますが、山田が見つからない限り、あなたから証言をおおぐしかないんですから」

玲奈「職場で変な噂になったら、わたしは働けなくなってしまいます！いま就職って、大変なんですよ。鈴木くんも大学出たのに就職が決まらなくて、バイトで生活してましたし、山田くんも派遣で働いてて。わたしも、いまの会社から内定をもらうのは、ほんとうに大変だったんです。それなのに、警察から呼び出しされるなんて、そんなことになったら、もう、働けなくなっちゃう！もう、許してください。わたしは被害者です！もう、こんなこと、早く忘れたい！」

円城寺「お気持ちは、わかりますけど。2人の人間が死んでますからね。やはり、それなりに時間はかかりますよ。ただ……」

玲奈「……なんですか？」

円城寺「ただ……。もし、鈴木が殺害されていた、としたら。その凶器が特定されたとしたら、事件の解決は早いです。凶器があるとしたら、山田が保持しているか、丘の上公園のどこかにあるはずなんです。

どちらにしても山田を捕まえるか、凶器が発見されるか。

それが、はっきりしない限り、あなたには、これからも協力をおおぐ他ありません」

舞台暗転。

玲奈、衣装チェンジで私服。

舞台、向かって右側から、スポットライトに照らされて、玲奈が歩いてくる。

玲奈は、ゴム手袋をしている。

玲奈、周囲を気にしながら。

そして、おもむろに、右手に握りしめていたものを、舞台の右側へ投げ捨てる。

玲奈、逃げるように、もと来た方角へと走り去る。

舞台暗転。

玲奈、舞台左側から登場。

今まで走ってきたので、息をきらせて。

ようやく、もう安心、という表情。

はっ、と両手のゴム手袋に気づき、それを急いで取って、ポケットへ押し込む。

そして舞台右側から円城寺、現れる。

円城寺「渡辺さん。こんな夜遅くに、どちらへ？」

玲奈「あっ！・・・ちよ、ちょっと・・・眠れなかったものですから」

円城寺「どこへ行ってたんですか？」

玲奈「ちよ、ちょっと・・・」

円城寺「あなた、今、丘の上公園に行ってきたでしょう？」

玲奈「・・・・。」

円城寺「丘の上公園で、あなたは、これを棄てましたね」

円城寺、そう言うとポケットからワインの栓抜きを取り出す。

円城寺「これはワインの栓を抜く道具なんですけど、小さなナイフがついているんですよ。コルクの周りが密閉されてますよね、それを切るためのナイフです。

まず、このナイフで切って、コルクをむき出しにしなければならないわけです。

そして、このナイフが、鈴木殺害の凶器ですね。

では、なんで、あなたが殺害の凶器を持っていたのか？

その理由は、たった、ひとつです。

あなたが、鈴木を殺したからです」

玲奈「・・・・。」

円城寺「鈴木は旅行の後、一度だけバイト先のバーに戻っているんですよ。

実はオーナーが、鈴木に旅先でおみやげを頼んでいたんです。

鈴木はバイト先で、一生懸命、働いていたらしいんですねえ。

バイト仲間たちの人望も厚いし、オーナーも鈴木を、とても、かわいがってましてね。

旅行から帰って、鈴木はバイト先のみんなに、自分は結婚しますと、とても喜んでいましたそうです。

相手は高校時代の、憧れだった人、とのことで。

あなたのこと、ですね。

オーナーも喜んで、記念に高級なワインとワイングラスを2つ、そして、この栓抜きを鈴木にプレゼントしたんです。

丘の上公園。夜は星がきれいですね。

街の夜景も見渡しながら。

鈴木はワインと、ワイングラスを2つ。それぞれ手に持っていた。

あなたは、この栓抜きを持って、ワインをあけるはずだった。

ところが、あなたは、この小さなナイフで、鈴木の胸を刺した。

そして、鈴木は、ガードレールごしから、斜め後ろへ、すべり落ちるようにして崖から落下した。

鈴木は遺体のそばに、砕けた高価なワインのボトルと、2つのワイングラスがみつかりました。

あなたは、どうして鈴木を殺したんですか？

鈴木は、こんなにも、あなたを愛していたのに。

あなたは、鈴木と結婚したくなかった。

そういうこと、なんですか？」

玲奈「わたしは・・・山田くんが好きだった。だから、鈴木くんとは結婚なんて、できない・・・」

円城寺「内村をクルマで轢き殺したあなたをかばったのに。あなたは鈴木に、すべての罪を、なすりつけようとした。ドライブに行きたいと言いだしたのは、あなたです。クルマの免許を取りたいから。田舎のどこかで、運転の練習をしたいから、と。ブレーキとアクセルを間違えたんでしょ？鈴木はクルマのマニア。そんな間違いで人を轢き殺したりはしない」

玲奈「鈴木くんが言い出したんです。田舎のほうで運転を教えてくれるから、って」

円城寺「でも、実際には、横浜を抜けたあたりから、あなたはクルマを運転していた。そして内村を轢き殺した・・・」

玲奈「いえ、ほんとうに、わたしは殺してないんです！ひいてしまったんですけど、死んでなかった」

円城寺「鈴木は、あなたをかばうために、なにも起こらなかつたようにしようと。必死だったんでしょね。好きな女のために、ね」

玲奈「でも、あたしは・・・」

円城寺「山田は怖くなって、警察にすべてを話そうとした。だから鈴木とあなたは、山田を殺した」

玲奈「わたしは、やってません！鈴木くんが・・・」

円城寺「あなたは鈴木に連れられて、鈴木の子の実家に行きましたね。その周辺に、山田の遺体があるんですか？」

玲奈「・・・鈴木くんの実家の裏山・・・古い井戸のなかに・・・。ほんとうに、わたしは、山田くんを殺したのは鈴木くんなんです！だから、だから、あたしは鈴木くんとは結婚なんて、できない！」

円城寺「渡辺玲奈、鈴木信也殺害容疑で緊急逮捕します。時間はたくさんあります。ゆっくり、お話をお伺いしましょう。うそはね、必ずバレるんですよ。正直に、そして、罪をつぐなってください。鈴木信也は、そんなにしてまで、あなたを愛していたんですから」

☆おしまい